

大学史特集展 26 駒沢移転 110 周年記念展示

麻布から駒沢へ

令和 5 年

4 月 10 日 (月) ~ 7 月 28 日 (金)

2023 年 4 月 10 日 1st edition

ごあいさつ

本学は、はじめから駒沢の地にあったわけではありません。明治 15 (1882) 年、東京府麻布区北日ヶ窪町 (現在の港区六本木ヒルズ周辺) に「曹洞宗大学林専門本校」として開校しました。それから約 30 年後の大正 2 (1913) 年、今から 110 年前にまだ農村だった駒沢村に引っ越してきたのです。

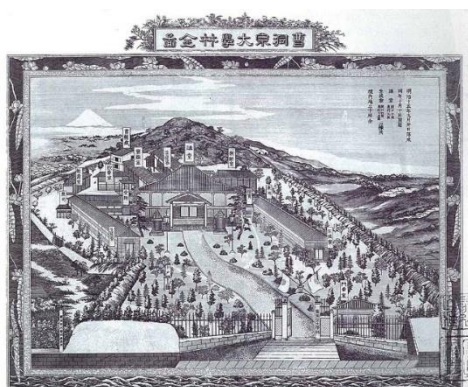
今回の大学史特集展では、移転 110 年の節目の年に際して、『大学建築事務所日誌』など当時の記録や古写真などから、移転の足跡を振り返るとともに、当時すでに開通していた玉川電気鉄道 (通称: 玉電) と本学との関りをとおして、駒沢界隈を中心とした地域の変化を紹介していきます。

今回、東急(株)、東急電鉄(株)の格別の計らいにより、玉電のレールや駅舎上屋などの鉄道関連遺物を借用・展示しております。併せてご覧いただければ幸いです。

駒澤大学禅文化歴史博物館

1. 本学開校と日ヶ窪校舎 明治 15 (1882) 年

本学は、明治 15(1882)年 10 月 15 日に麻布区北日ヶ窪において、曹洞宗大学林専門本校(後に曹洞宗大学林専門学本校)として開校した。江戸時代の各地の学林や明治 8(1875)年に開校した本学の前身曹洞宗専門学本校は寺院内に設置された学問所であったのに対し、曹洞宗大学林専門本校は独立した校地を持つ曹洞宗僧侶及び子弟の育成機関であった。



曹洞宗大学林全図 明治 22 (1889) 年以降
絵図右上の池は毛利池



日ヶ窪時代の曹洞宗大学正門



日ヶ窪校地跡地の現在の風景
中央奥のテレビ朝日付近に日ヶ窪校地があったと推定される

2. 大学林制度の変革と改称 明治 32、37 (1899、1904) 年

本学は、明治 32(1899)年に私立学校令の認可を得、曹洞宗大学林と改称した。明治 36 (1903) 年までに学制の改変が行われ、曹洞宗高等学校は曹洞宗大学林に合併された。明治 37(1904)年には前年の専門学校令の発布により、校名を曹洞宗大学と改称した。



明治 34 (1904) 年制定の制帽をかぶる学生



曹洞宗大学時代の校旗
大正 3 (1914) 年制定

3. 曹洞宗大学移転問題 明治 37~45(1904~12)年

明治 37 (1904) 年の専門学校昇格以後、曹洞宗大学では、3度の移転問題が持ち上がった。麻布区筈町、巢鴨、国府台(千葉県市川市)などが移転先としてあがった。教職員や学生の反対運動が巻き起こり、これらの計画は実現されなかったが、学生数の増加、校舎の老朽化、用地の狭さなどの問題などは深刻な問題であり、広い場所への移転は時間の問題であったといえる。

①麻布区筈(こうがい)町移転計画 明治 37(1904)年

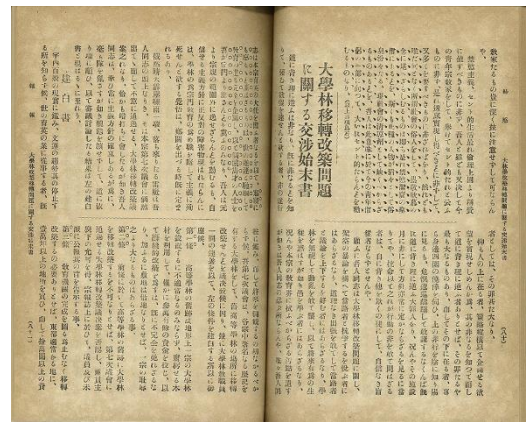
専門学校昇格の直後、曹洞宗高等学林の跡地の麻布区筈町(現港区西麻布二丁目、永平寺東京別院長谷寺の隣接地)への移転問題が持ち上がった。しかし、用地の狭隘、移転改築資金の不足などから、教職員の反対運動が起こり、回避された。

②巢鴨移転説 明治 42(1909)年

『和融誌』第 13 卷 1 号 (1909 年 1 月) によると、老朽化・狭隘などの理由から、「巢鴨方面」(東京都豊島区)への移転が決まると記されている。顛末については不明。

③国府台(こうのだい)移転説 明治 44(1911)年

学生たちの間で、国府台に移転するという噂が流れ、明治 44 年 12 月には、学生たちが移転反対の同窓会大会を開き、同盟休校へ突入するという事態となったが、教職員の説得により解決された。



「大学林移転改築問題に関する交渉始末書」

『和融誌』第 8 卷 2 号 本学図書館提供

国府台移転反対学生運動の記念写真 建功寺提供



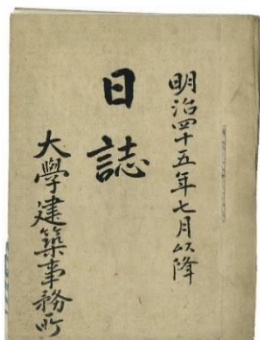
4. 駒沢村への移転 明治 45～大正 2(1912～13)年

明治 45(1912)年 1 月、日置黙仙(後の曹洞宗管長)、波多野承五郎(三井物産重役)等の斡旋・紹介により、日ヶ窪校地を牧田環氏に 26,500 円で売却し、あらたに荏原郡駒沢村に約 11,000 坪の敷地を購入することが決まった。

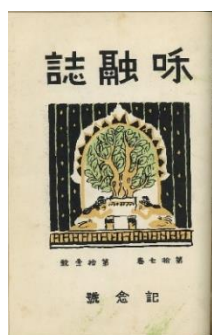
移転場所は、郷力三郎氏が経営する養鶏場が所在する場所で、大正 2(1913)年に駒沢村への移転が完了し、同年 1 月 26 日に仮開校式が行われ、翌日より授業が開始された。麻布区北日ヶ窪の旧校地と比べると約 3 倍の広さであった。

○駒沢移転の頃の本学

駒沢移転では、日ヶ窪校地の木造建築物の多くを解体し、駒沢へ運び、復元・改築を行った。移転の経緯については、本学に残る『大学建築事務所日誌』(明治 45 年 7 月 26 日～大正 2 年 3 月 10 日)や大正 2 年 11 月発行の学内雑誌『和融誌』(移転記念号)から知ることができる。



『大学建築事務所日誌』
当館蔵



『和融誌』移転記念号
本学図書館蔵



左 : 大講堂移転時の棟札 当館蔵



右上 : 移転直後の本学学生 (大正 2 年) 建功寺提供



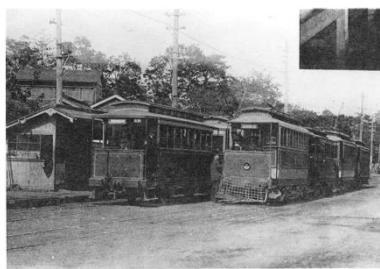
右下 : 駒沢に移転された大講堂 (大正 2 年) 当館蔵

○移転の頃の駒沢地域

明治時代の駒沢地域は農村地帯であり、現在本学が所在する校地も移転直前までは 3,000 羽を飼う養鶏場であった。しかし、明治 40 年に玉川電気株式会社により渋谷から玉川まで路面電車が全線開通すると、沿線地域への電灯電力供給が可能となり、大正元(1912)年には東京信託会社により、日本初の田園都市計画が、駒沢村深沢と玉川村にまたがる桜新町停留場南側一帯で企画され、住宅地開発も行われた。



曹洞宗大学遠景 大正 2 年



玉電駒沢駅周辺 大正 2 年



玉電駒沢駅周辺 昭和 11 年



玉電時代のレール 昭和時代 東急(株)蔵

渋谷再開発に伴う東急百貨店東横店西館の解体工事の際に、2 階玉川改札周辺で発見された。1 階では、玉電時代のアーチ状の建造物が確認された。

5. 本学の駒沢移転と玉川電気鉄道株式会社

大正時代から昭和40年代にかけて、本学学生にとって通学的手段として玉電は欠くことのできないものであった。一方で、駒沢移転を行う上で、玉電のもう一つの基幹事業「電灯電力事業」も不可欠なものであった。

『大学建築事務所日誌』には、移転改築終了間近の大正元(1912)年12月から大正2年1月にかけて、玉川電気鉄道株式会社(日誌では玉川電気会社)の名前が頻繁に登場する。

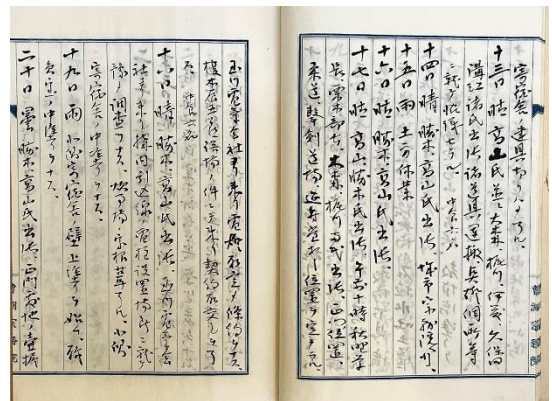


玉電に乗り込む本学学生 昭和12年

玉電関係記事のみ抜粋
(大正元年十二月)
十七日 玉川電気会社ヨリ
来り、電灯取定メ条約ヲナス、
十八日 玉川電気会社ヨリ
来り、構内引込線ノ電柱設置
場所ニ就テ予メ調査ヲナス、

『大学建築事務所日誌』

大正元年12月12~20日



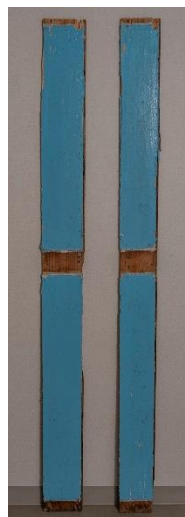
○玉電の砂利輸送と駒澤大学玉川キャンパス

砧線は、多摩川砂利会社から東京市電気局への砂利供給を目的に、玉電と多摩川砂利会社が契約し、大正13(1924)年に開通した玉川と砧本村を結ぶ路線である。終点の砧本村駅は、もとは砂利の集積場の傍らにつくられた駅であったが、昭和7(1932)年に駅前に「わかもと製菓」の工場が建てられ、通勤の乗客輸送も担った。工場跡地は昭和42年に本学が取得し、駒澤大学玉川キャンパスとなっている。

砧線廃線後、砧本村の駅舎の一部はバス停として再利用されていたが、2022年12月、老朽化のため撤去が行われた。

解体後の砧本村バス停上屋

東急電鉄(株)蔵



上：砧線砧本村駅 昭和40年代 東急(株)提供



下：解体直前の砧本村バス停 令和4年

6. 駒沢大学駅で見ることができる玉電関係資料

本学が所在する駒沢地域では、東急田園都市線駒沢大学駅トイレにおいて、旧玉川線の敷石として保存されていた廃材を利用、ドトールコーヒーショップ駒沢大学駅前店において、旧池上線駅舎古材を使用したベンチや旧玉川線の敷石として保存されていた廃材を利用しており、地域の歴史を次世代に繋ぐ活動がなされている。



「Green UNDER GROUND」HP